

第6章 総 括

はじめに

本章では平成9、10年度の発掘調査成果及び平成10年度（1998）から13年度（2001）までの保存処理事業及び令和4年度（2022）の出土遺物の再整理事業の成果を総括し、本経塚の意義を提示したい。

（1）隅田八幡神社経塚の発掘調査成果

調査の結果、第1区から3基の経塚及び経塚を囲む3基の石垣が確認された。経塚はいずれも、土坑状の穴を掘り、底に板石を据え、その上に経筒及び外容器を置き、周囲を石で囲む構造であった。最も古い時期に造営された第2経塚からは常滑焼甕、経筒、紙本経、銅鏡、青白磁小壺、青白磁合子、短刀、火打鎌、銅銭が出土している。12世紀後半の常滑焼甕は第2経塚の底石に接した状態で検出されており、常滑焼甕の中には経筒、紙本経、銅鏡3点、青白磁小壺2点（身1点、蓋1点）が納入されている。経筒及び経筒内の紙本経は全国的にみても保存状態が極めて良好で貴重な資料である。経筒の蓋及び底板は12世紀代の銅鏡を転用し、紙本経は長寛2年（1164）9月6日の書写があり、妙法蓮華経八卷である。第2経塚の下層では銅鏡4点が出土し、第2経塚の南東には、常滑焼甕の頸部や口縁部の付近に、銅鏡2点、青白磁小壺4点（身1点、蓋3点）、短刀11点、青白磁合子、火打鎌、銅銭等が出土した。火打鎌は2点出土し、経塚供養の際に灯明の火を切るために使用された可能性がある。ただし、第1区で火打鎌が4点出土しているが、火打石の出土は確認されていないことから、実用的な使用ではなく一種の祭祀具として埋納された可能性も考えられる。また、和歌山県下における経塚は30遺跡以上が報告されているが、火打鎌の出土事例は粉河産土神社経塚、庵主池経

塚、那智経塚のみであり（上野・巽 1963、大場 1970、粉河町史専門委員会 2003）、注目される。なお、第2経塚の上層には石組の間に中世の瓦器片、短刀片が挟まって検出され、第2経塚が12世紀後半（平安時代末期）に造営された後、13世紀（鎌倉時代）に手が加えられたとみられる。また、同時代に石垣2は第2経塚が中心となるように周囲を1辺約3.3m（10尺＝1丈）四方で囲んで造られたとみられる。

続いて、第1経塚が造られた。第1経塚の出土遺物には備前焼甕、須恵器甕、経筒及び関連部品、銅鏡、青白磁小壺蓋、青白磁合子身、銅銭がある。備前焼甕及び須恵器甕の破片は第1経塚から散乱した状態で検出され、第1経塚の底面には備前焼甕の底部破片が検出され、第1経塚出土経筒は中に小型経筒や環状部品、銅鏡4点、経筒関連部品が納入されていた。当該経塚の特筆すべき点として、2点の経筒の筒身に合う蓋が確認できないこと、経筒内に小型経筒や銅鏡がみられること、出土した銅鏡4点の製作年代が11世紀後半から13世紀代と約200年の間隔があることが挙げられる。これらの点から、第1経塚は埋納当初の状況から何度も手が加えられていると考えられる。なお、小型経筒の筒身及び底板には銘文が確認されたが、年代は明らかでなく、筒身の高さから鎌倉時代以降に流行する六十六部聖の廻国納経の経筒など、中世の納経に伴う経筒であると推察される。このほか、青白磁合子や銅銭は詳細な出土位置は不明だが、第1経塚の石組の間や第1経塚付近等から出土したと思われる。第1経塚の造営時期は真上に建つ宝篋印塔銘が元中2年（1385）であることや備前焼甕の時期が14世紀であることから南北朝時代であると考えられる。同時期には石垣2が西へ延長されたとみられ（石

垣2)、第1経塚を中心とした基壇として機能していたとみられる。

最後に第3経塚が室町時代前期に造られたと考えられる。第3経塚からは銅鏡3点と火打鎌1点が検出され、銅鏡3点の製作年代はいずれも12世紀中葉から後半である。銅鏡3点のうち1点は第3経塚の底石の上から検出された。しかし、経典埋納に係る外容器や経筒は確認されなかった。なお、当該経塚には底石と一部の石組が残っているが、上部は削平されている。第3経塚の造営と同時期に、3基の経塚が一行に並ぶ基壇として石垣3が造られたとみられる。

近世になると、3基の経塚と2基の石垣を囲むように石垣1が造られた。このとき石垣2は石垣1の築造のため、東西の石垣の両端は切り取られたとみられる。なお、石垣1の北面石垣の下からは江戸時代のものと思われる瓦片が出土した。

(2) 隅田八幡神社経塚の変遷

調査結果から、隅田八幡神社経塚の変遷は大きく4期に分けられる(図52)。

[第1期] 12世紀初めに、隅田八幡神社の存在が当地域の在地文書である「隅田家文書」から明らかとなる。12世紀後半(平安時代末期)に第2経塚が当地に築造される。

[第2期] 13世紀(鎌倉時代)に、第2経塚の石組の上半部に手が加えられるとともに、第2経塚を中心として、周囲を囲むように石垣2が築造される。また、『隅田八幡神社文書』によると、弘安10年(1287)からしばしば法華経供養が行われたことがうかがえる。

[第3期] 第1経塚が南北朝時代に築造され、第1経塚の上に元中2年(1385)銘の宝篋印塔が建てられる。同時期に第1経塚が中央に位置するよ

うに石垣2が西に延長される(石垣2')。さらに、第1経塚の築造後から室町時代前期までに、第3経塚が築造される。第3経塚と同時期に、石垣3が築造され、3基の経塚が並ぶ壇が造られたとみられる。

[第4期] 石垣1が江戸時代に築造され、現在の形となる。

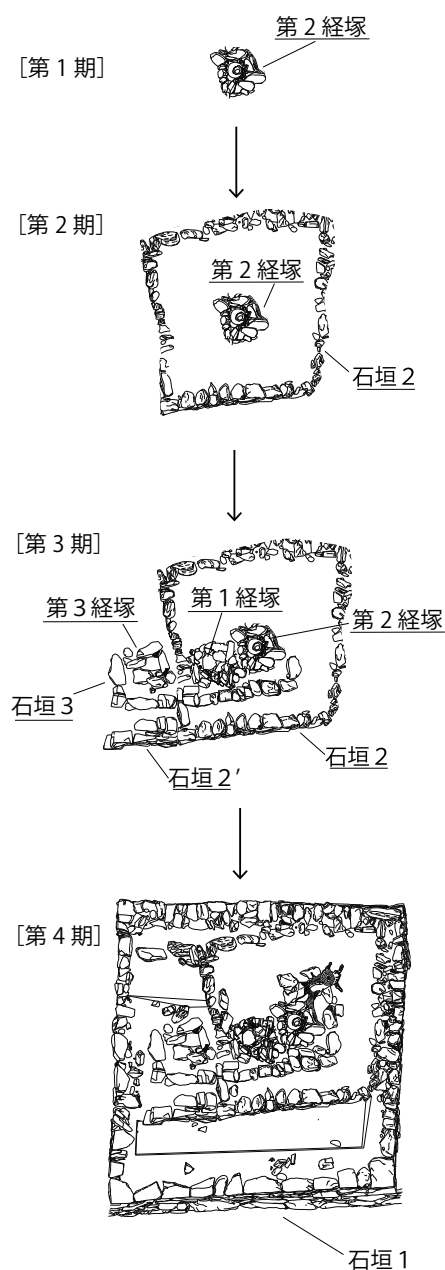


図52 隅田八幡神社経塚の変遷

(3) 隅田八幡神社経塚の特徴

ここでは、第5章の論考を踏まえ、隅田八幡神社経塚の特徴を挙げる。

中村論考では、和歌山県内の経塚の発掘調査研究史を概観し、和歌山県内の経塚は熊野三山及び高野山地区に造営例が多いことを述べ、隅田八幡神社経塚は経塚そのものを発掘調査した数少ない事例であると評価する。また富加見論考では、和歌山県内の経塚の立地が寺社と関係のある場所に造営されており、隅田八幡神社経塚も例外でないことを述べる。

岩倉論考では、平安時代の隅田庄成立から豊臣秀吉政権による庄園制度の解体までの隅田庄の変遷を概説する。また、本論考では平安時代中期の隅田庄の有力者である長忠延や隅田八幡神社経塚出土の紙本経に書かれた藤井氏が古代的那賀郡に基づく豪族である可能性があることから、本経塚のある伊都郡とのつながりを示唆する。

中川論考では、隅田八幡神社経塚の銅鏡の出土状況及び製作年代から、第2経塚出土の銅鏡は強く辟邪を意図した埋納であること、第1経塚出土の銅鏡は中世の経塚でありながら、古代的な要素を残した埋納であることを指摘する。

吉川論考では、隅田八幡神社経塚出土の紙本経は妙法経の中でも、中世的な形に変化していく時期の書写・埋納の実態を示す好例であり、地方寺社における妙法経書写の実例の一つであると評価する。

(4) まとめと今後の展望

本書では『平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報』（橋本市教育委員会 1999）刊行時には掲載できなかった資料を整理し、平成10年度（1998）から平成13年度（2001）

の保存処理の成果及び令和4年度（2022）の再整理事業の成果をまとめ、隅田八幡神社経塚について再検討を行った。この結果、改めて隅田八幡神社経塚から検出された複数の遺構の時期変遷を提示し、出土遺物について主要な資料の整理成果を提示することができた。特に第2経塚出土の紙本経の埋納状況や書写内容について、保存処理事業の様子も含め提示したこと及び経筒及び銅鏡についても特徴やおおよその製作年代を提示したことは今後の経塚研究に大きく寄与できるだろう。また数々の資料は当時、隅田庄を統治し、隅田八幡神社を取り仕切っていた隅田一族との関係も考えられ、地域史を明らかにする資料としても貴重である。本書を通して、皆様が古代から中世における信仰の一形態に興味を持っていただければ幸いである。

参考文献

- 岩倉 哲夫 1992「大高能寺」『日本名刹大辞典』圭室 文雄（編）雄山閣
- 上野元・巽三郎 1963『熊野新宮経塚の研究』熊野神社宝館
- 大場 巖雄（監）1970『那智経塚—その発掘と出土品—』那智大社
- 粉河町史専門委員会 2003『粉河町史』粉河町
- 関 秀夫（編）1985『経塚遺文』東京堂出版
- 橋本市市史編さん委員会 1975『橋本市史 下巻』橋本市
- 橋本市市史編さん委員会 2005『橋本市史 民俗編・文化財編』橋本市
- 橋本市教育委員会 1999『隅田八幡神社経塚発掘調査概報』橋本市埋蔵文化財調査概報28 橋本市教育委員会